

南台湾における廟の「集い機能」に関する研究

— 若者の廟利用意識について —

鳥飼香代子・蕭 玉 燕*

Temples Which Open for Residents to be in Communication in South Taiwan — The Role of Temples for the Young Generation

Kayoko TORIKAI and Yuyen HSIAO

(Received September 2, 2002)

In Taiwan, temples play important roles for neighborhoods as religious facilities as well as urban public places where People often visit to chat with each other.

This paper researches how temples are used in South Taiwan.

In this paper, we paid special attention to how the young generation see role of temples for themselves and their neighborhoods. In the first part of the paper, we described one interesting feature that over 60% of temple visitors were under 40 years old, most of them between 20 and 39 years old. We researched the college students located at the boundary between the town and countrysides in South Taiwan.

We were able to conclude that young generation come to temples for their anxieties and prayers. They think that the role of temples is important and that they are multipurpose facilities for neighborhoods. Of course, the young generation support the activities and administration of temples with their family.

Key words : South Taiwan, anxieties and prayers, multipurpose facilities, young generation

1・はじめに

台湾では近隣社会における重要な施設として廟が利用されている。宗教施設である廟は、同時に住民が日常的に訪問し、しばらくの間滞在する、或いは情報交換や様々な余暇活動をするいわば住民が集う機能を持った施設でもある。筆者らは廟の施設としての今日的な役割を明らかにしたいと考えているが、これまでの一連の研究で廟の立地状況の分析、空間構成、農村部での使われ方、利用とその場所について報告してきた。利用とその場所を分析する中で、若い女性の利用が高いことが明らかとなったことを踏まえ、本稿では若い世代は廟の役割をどのように考えているかを検討する。この点を明らかにすることは、廟の地域施設の将来性に関して重要な示唆を与えられる。具体的には若い世代の廟認知程度（近隣の廟の認知と廟活動や管理への認識程度）さらに具体的な廟との付き合いについてみる。調査は2000年6月1日から15日間の間の授業時間を活用してアンケート調査を実施した。

* 熊本大学自然科学研究科博士後期課程

2・調査対象の属性

(1) 調査対象者の出身地：(図1参照)

調査を行った学校は台南県にあるため、学校所在地の台南県出身者が一番多く（137／305人）、半数ぐらいである。その次は隣にある台南市 36 人で、高雄市 35 人、高雄県 16 人・・・である。その他の 77 人の分布は次のようである。

都市	基隆	台北	桃園	台中	南投	彰化	雲林	嘉義	屏東	合計
人数	1	4	1	4	3	11	16	27	10	77 人

図1の分布図から見ると、ほとんど台中以南の県と市だと分かる。このことは、本調査対象者は廟信仰が盛んだといわれる地域出身者が多いことを示しており、従って、台湾全体の学生の平均像より廟に親近感を持った学生が多い可能性がある。

(2) 性別・年齢：(図2, 3参照)

今回は台湾台南県塩水鎮にある南榮技術学院の外国語学科学生日間部170人（男性43人、女性127人）と夜間部135人（男性35人、女性100人）の全部で305人を対象として廟の意識調査を行った。文系の学生なので、女性が男性より多い。（図2参照）年齢層から見ると日間部はほとんど16～19歳で、20代が2人しかいない。夜間部の多数は昼間仕事をして、夜学校に通う半分社会人だと言える。20代が多く、30代と40代はわずかだけである。全体（288／305人）から見るとほとんど10代、20代の若者である。

(3) 宗教信仰について：(図4参照)

南台湾の若者は宗教の信仰についてどのように考えているのであろうか。自分は仏教の信仰者だと思っている人は70人で、道教の信仰者は71人である。両方を合わせて見ると約46%で、「信仰なし、自由」の45%（137人）とあまり変わらない。つまり約半数は仏教や道教の信仰者であり、残りの半数は信仰なしである。台湾では若い人の宗教信仰は両親や家族の影響を受けて比較的多いと言われている。又台湾ではお寺へ行くのが仏教の信者で、廟へ行くのが道教の信者である。しかし、仏教と道教の神様を重ねて祭る所が多いので、「仏道教」と自称する信者も出てきていることが分かる。「台湾の民俗と文化」^{注1)}に次のように述べている。

「渡辺欣雄（1986）によると台湾の漢民族の宗教はきわめて複雑で、仏教と道教に民間信仰までもが混然と一体化した、＜現世利益＞信仰とも言うべきものである。従って寺廟に祀られる神も様々である。」このことから「仏道教」信者と答えた若者が出てくるのも可笑しくないといえる。キリスト教の信者の場合には、お線香を持つことや他の宗教施設へ行くことを避ける傾向にあること、さらに図13とあわせて考察すると仏道教や道教の信仰者だけでなく、仏教や信仰自由な人たちの場合も廟へ行くことが今回の調査で明らかである。

道教と自称しているひとは1／4（71／305）しかいないのに、図13同伴者では行かないと無解答者は全部で1／7（40／305）である。だから廟に通う人は実は信仰する宗教とは一致していないと推察できる。つまり宗教いかんにかかわらずに6／7の人が廟へ行くと分かった。

3・廟の管理運営について

(1) 廟の管理人：(図 5, 6, 7 参照)

若者は廟をどの程度知っているのでしょうか、又、管理運営についてみてみよう。廟の管理人は雇用だと思える人は175人で、ボランティアは19人である。さらに半数以上の廟はきちんと管理する人がいると分かった。ボランティアの数はそんなに多くないが、注目すべき存在である。そして個人の持ち主で管理していると答えたのは24人である。なお知らないと答えた人は30%弱と少なく、かなりの若者が廟の管理人について知っていることが分かる。さらに廟の土地所有状況を知っているかどうかを見ると(図6参照)、93人の答えは募金共用地で、41人は寄付の土地であると答えている。しかし、知らないと答えた若者の数は約半数と多いことが分かる。次に廟の運営上重要な収入源をみる。(図7参照)一般に知られている廟の収入はやはり賽銭(172人)と個人寄付(150人)であるが、答えもそれを反映している。そして事業経営(40人)をしていることを知っている若者もいる。さらに知らないと答えた若者が多い。事業経営の内容：例えば、市場、夜店、駐車場の経営や土地、家という不動産の賃貸などである。古老によると、昔よく分家のトラブルがあった時、その家や土地を廟に寄付するのである。即ち神様に捧げると言える。廟はお金の余裕があると、近所住民のためにいろいろなイベントが行いやすいし、困っている住民の貧困救済もできるのである。そうすると、廟は住民にとって安全な存在だし(神様の聖域)、頼りにもなれるコミュニティの場所である。

(2) 廟の運営方法について：(図8参照)

役所の正式登録では、廟の組織は財団法人、管理委員会、管理人と分けられている^{注2)}。財産が多い場合には、「財団法人」にすることが多いようであり、これは董事会が設され、リーダーは董事長で、下に董事と監事が選ばれている。三つの運営方法の中で最も多いのは管理委員会なので、若者の答えも委員会に集中している。「委員会」のリーダーであるのは主任委員で、その下に委員や監事などがいる。いずれも信者達が投票で選ばれる。図から見ると、委員会146人は一番多く、半数ぐらゐを占めている。「投票で決める」と答えたのは8人であるが、これも委員会という組織ではないかと思われる。そして「個人指名」なのが13人であるが、これは個人所有の廟だと考えられる。しかし、知らないと答えた若者も多い。

4・近所の廟との付き合い状況について

若者の具体的な廟との付き合いを見てみよう。

(1) 近所の廟について：(図9参照)

80%(248/305)以上の人の近所に廟があると調査から分かった。あちらこちらに廟が分布していると考えられる。そして近所に廟がないのは31人で、1割しかないのである。一方、「知らない」や「無回答」のを合わせてみても12%である。廟の分布は他の宗教施設より普及していると考えられる。さらに古い廟(165/305)も新しい廟(29/305)より多く存在している。2/3ぐらゐの人は近所の廟の存在を日常生活の中で認知していると言える。このことから廟が若者にとって親近感のある存在ではないか。生活施設として違和感がなく、親しみやすい場所のひとつになっていると考えられる。

(2) 祀っている神様：(図 10 参照)

神の由来については注(「台湾の道教と民間信仰」^{注3)})に説明した通りである。図 10 で特徴的な点は若者全員が祀っている神様の名前を知っていることである。

図 10 から見ると、一位になっている神様は海の女神「媽祖」である。昔の移民は大陸から台湾に来る時、まず台湾海峡を渡らないと夢が叶わないので、その心の頼りは「媽祖」である。「その出自は福建沿海小島漁村の巫女で、生前脱魂して家族の海難を救った伝説があり、死して神となり、よく洋上に神燈を現して難破船を港に導航した靈験で、崇拜されるようになった。」^{注4)}とされている。次に注目したいのは「王爺」である。「媽祖」は全台湾に信仰されているのだが、「王爺」は南台湾の信仰シンボルだと言える。「保健神」である「王爺」は次のように述べられている。「高温多湿の亜熱帯性気候である未開拓の台湾は、まさに瘴癘の地、風土病の温床で、せっかく波濤を乗り越えて、たどりついても居住に適せず、海洋に次ぐ阻力となった。とりわけベストを最とする疫病が昌蕨を極め、犠牲が甚だしかった。そのため疫病神を王爺と尊称して祀りこめ、寛宥を願って、船流しする送温の風習が盛大になり、避疫神として篤信されるにいたったのである。」^{注5)}

「玉皇上帝」は道教でランクが一番高いリーダー神様のため、祀る廟も多くある。「関羽」の場合は歴史伝説で「義気と信用のある人」と「初めてソロバンと帳簿を使った人物」といわれるためにいつか台湾で商売をしている人たちが祀る「商神」になっている。「済公」は肉とお酒を許されたお坊さんで、医者神様である。その他にももちろん様々な神様が祀られているが、台湾人の廟信仰の熱狂の一斑が覗える。このような環境の下で、若者も廟に祀っている神様の名前に詳しいと考えられる。^{注6)}

(3) 廟に行く理由：(図 11 参照)

日間部学生の多くは、うまくいかなく、不安で悩みがあるときに、相談できる人がいないとか誰に相談しても解決できない閉鎖状況になったとき、廟に来る(38人)。さらに夜間部の学生も同様である(29人)。廟の神様も精神相談のカウンセリングの役割を果たしていると考えられる。料金が要らないし、いつ行っても聞いてくれる。しかもプライバシー厳守である。次に廟へ行く理由は「神様の誕生日、祭りがある時」である。ほとんどの廟のメインイベントは主神の誕生日の日に行く。他の廟の御神輿と信者達はお祝いに來るし、伝統劇や人形芝居も行われる。さらに近所の信者達はお供え物を用意して、廟庭に並べて、お祝いをする。このような祭りに参加するのは若者にとって楽しみの一つと考えられるので、行く人が多い(42人)。またお祈りによって精神安定が得られた人は、感謝の気持ちで誕生日のときにお祝いに行くのだと考えられる。次に注目したいのは神様に、御神籤を引くという「占い」をする時に行く人も少なくないと言える(32人)。正式に占いに行くと、お金がかかるし、直接人間(占い師)とタッチする不安もないから、御神籤の占いはよく利用されている^{注7)}。また試験直前日間部の学生は廟へ行く人が夜間部より多い。学校の成績や一生に影響する進学試験が気になるためである。一方、時間潰しや經由する時ちょっと寄っていくという「思いつく時」に軽く利用する人もいる(25人)。あるいは行く時が決まっていないという家族や友人たちに誘われて行く場合も多い(37人)。「その他」は10人と少ないが、特別な場合が含まれている。6人は体の調子が悪い時いく。2人は廟庭に夜店がある時、1人は旅行する前、もう1人は車が猫や犬にぶつかった時、厄払いに行くのである。このようにさまざまな目的をもって、廟に行っており、若者の日常生活を支えてきたものの一つが廟であるといえる。

(4) 廟へ行く目的：(図 12 参照)

半数 (148 人) の若者は参拝という当たり前の目的である。祭り (20 人)、占い (9 人)、時間潰し (8 人)、ボランティア (3 人) に行く人もみられ、宗教以外の目的で行く若者がいることが分かる。そして無回答の人が意外と多いが (114 人)、「誰と行く」(図 13) という集計で「行かない」(24 人) と「無回答」の (16 人) を合わせても 40 人しかいないので、無回答の人でも廟に行っていると考えられる。このことは一つだけの目的ではなく、多目的に廟を利用しているのではない。

(5) 廟へ行くときの同伴者：(図 13 参照)

2/3 (209 / 305 人) の人は家族と一緒に廟へ行く。特に若い日間部の青少年は親が同行させられていると、成長振りを神様に報告し、今後も守護神として存在してほしいと考えられる。そして友達同士で行くのは夜間部の方 (25 人) が日間部 (17 人) よりやや多い。さらに一人で行く場合も少数ある (24 人)。また「自分は行かないが家族が行く」と答えた若者もいる (24 人)。宗教信仰の項目でキリスト教者が 14 人いるので、この 24 人の中にいるか無回答の 16 人の中にもいるかもしれない。

(6) 廟へ行く頻度：(図 14 参照)

2/3 の人は行く日が「決まっていない」。だから用事がある時に行くとか思いつく時に行くと考えられる。そして「決まっている日」に行くのは 41 人いる。ほとんど神様の誕生日や毎月 (旧暦) の 1 日や 15 日に廟へ行く人である。旧暦の 1 日や 15 日に行ったら神様に願いが届くといわれているためであろう。また週に 1 回 (3 人) や月に 1 回 (24 人) 廟へ行くのは信仰深い信者のことだろう。さらに毎日行っている人もいるが (3 人)、特別な例である。中の 1 人は廟の管理人で、もう 2 人は家族が廟の管理人や個人所有の廟を管理していると予想される。

(7) 近所の廟で見たことのある活動：(図 15 参照)

南台湾でよく見られる活動は映画放映 (219 人) と伝統芝居 (242 人) である。これは本来は神様の誕生日や感謝の気持ちを表すとき、神様に見せるための「娯楽」であるが、娯楽の少ない時代の重要な楽しみの一つとして現在に伝えられているものである。そして近年カラオケが流行っているからカラオケ大会も祭りのときの企画の一つになっている。また「祈り法事」や「民俗活動」(獅子舞、御神輿パレードなど) 伝統楽器演奏の「演奏会」なども祭りのときよく見られる。農村部の広い廟庭で今もまたよく見られるのは休日の時の農産品展示会や夜店、近隣住民の結婚披露宴、農作物の干し場などである。さらに選挙の時、近所の住民や信者が集まってくる廟庭で政見発表会 (67 人) や選挙募金宴会 (24 人) が行なわれることが多い。さらに投票所として (90 人) 利用されることも多く、住民にとって慣れていることである。これらのことから住民にとって最も身近な施設であり、若者も廟の活動を通して廟に慣れ親しんでいるといえる。

(8) 近所の廟が果たしている役割：(図 16 参照)

不安・悩みがある時、廟ならいつでも気軽に祈ることができ、かつ祈りが届くと考えているため、廟は「悩み相談」の役割を果たしていると思う人が 194 人もいる。また近所のお年寄りにとって楽しく、ちょっと寄っていける場所である。台湾では十分な年金制度を実施していないためと考えられるが、町へショッピングや楽しみを求めて出かけることが少ない。だから廟でお喋

りしたり、碁を打ったりして、時間を潰すお年寄が多い。廟は「年寄りの憩いの場」(132人)だと多くの人に思われている。さらに、子連れの散歩や孫の面倒をみる人もいるので、廟庭も「子供の遊び場」(32人)になっている。そして住宅の密集地で、空き地や公園が少ない地域の住民にとって、廟庭は子供の重要な遊び空間である。注目したいのは「住民コミュニティの場」(91人)という役割である。廟を中心として、朝の運動、散歩、夕涼みをする時、交流も進んでいると考えられる。隣に誰が住んでいるか分かりにくい現代住宅の多い都市環境では、廟はその壁を突破でき、住民のコミュニティの場となる。また住宅が狭い地域では廟の庭が駐車場になるのも住民にとって便利なことである。もう一つよく知られているのは廟の「寄付機能」である(15人)。貧困救済や必要な時の物資援助をするのも廟の役割の一つである。例えば1999年の台湾中部大地震の時、廟を中心とした宗教団体の活動は知られている。近年大規模な廟を中心に、文化保存の目的で、附属図書館や文物展示館の建設に力を入れている。お年寄りの憩いの場だけでなく、いろいろな年齢層の人にも多く利用されるための施設づくりが試みられているといえる。このことを若者はよく認識しており、廟の役割を熟知しているといえる。

5・ま と め

若者は宗教信仰のいかんにかかわらず、廟へ行く傾向があることが分かった。廟の管理人や土地の所有状況；運営方法について過半数が認知している。若者の具体的な廟との付き合いもまず近所の廟の存在や祀られている神様の名前について知っている人がきわめて多い。廟に行く理由は、不安や悩みのため閉鎖感が強くなるとき、イベントのとき、占いを必要としたとき、などであるが、日常生活の延長線上で立ち寄るという多目的な施設である。廟へは親や友人、或いは一人でさまざまな同伴者と不定期に行っている場合が多い。近所の廟の活動についてはよく知っている。そこから廟の役割についても悩み相談、年寄りの憩いの場など具体的な利用に即してよく認識しているといえる。以上より、南台湾の若者は廟の存在や運営を認知しており、かつその地域施設としての役割をよく認識していると考えられる。この点から、廟の役割について次の世代への継承が行われているといえる。

注及び参考文献

- 注1) 宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一：「台湾の民俗と文化」―六興出版，1987年，pp122
- 注2) 廟の管理組織について：寺廟の組織は自由に形態を選択でき，その寺廟の組織規則で決めている。一般に仏教は管理人制が多く，道教は管理委員会制が多い。財団法人制になっているのは財産が多い寺廟である。―台南市政府民政局礼儀民俗課による
- 注3) 劉枝萬：「台湾の道教と民間信仰」―風響社，1994年，pp140～141
「もともと，台湾住民の多くは，福建・広東地方から渡ってきた開拓者である。その大規模な移民は明末以後のことだから，歴史の流れから見れば，割合に新しい。しかして，かかる大陸の旧社会からはみ出た棄民の大群れが，旺盛な冒険心に駆けられ，死を決して押し渡った東海の孤島への道は，茨の道であった。やがて定住して新社会が形成されると，そこに育まれた信仰はとうぜん新しい土着民たる＜台湾人＞の熱烈な要求に適合すべく，変容した形態であって，もはや郷貫の延長そのものではない。・・・海洋性は内陸性に対応し，台湾の地理的環境に徴して明らかである。しかして，その信仰面への投影は，例えば王爺船流しの風習，漂着神像と死体の崇拜，漂流木で彫像あるいは建廟した縁起，神燈導航伝説などが挙げられる。次に緊迫性とは，開拓の前線社会における，絶えず危険にさらされ，切迫した生活を強いられた，不安と貧困が，他力本願・刹那主義・御利益本位の信仰を助長したことである。・・・」移民という歴史的背景から神仏に対する信仰深いことは

言うまでもないことである。

注4) 同注3, pp133

注5) 同注3, pp134

注6) 同注1, 第2章—日本の台湾統治政策：3. 寺廟整理, pp121

神像に対する信仰のこだわりは次の記述からもっと明らかである。「私（宮本延人）、それからしばらくの間、廟の調査をして歩きました。・・・道教のああいう像もあるんですが、それを焼却したらどうなるかというアンケートを取ってみたいしました。罰が当たるとか、台湾の街が荒廃するとか、台湾の住民が皆死ぬとか、大雨が降るとか、その他いろいろなことがはねかえってきたんです。この寺廟整理の問題、一つの宗教をとにかく止めさせようという試み、これは大変ひどいやり方じゃないかと思うんです。」

注7) 同注3, pp146. 占い：神様の意志を判断する方法について—御神籤を引く前にすることは「擲筭」（ポアポエ）である。「中国では昔から普遍的に行われている。すなわち杯交を卜具とした占法であり、竹根あるいは木材をやや半月形に削り、二個をもって一対となし、片面が平坦で、片面が凸起している。平面が陽で、凸面を陰とみなし、神前で祈ってから地面に擲下して、陰面と陽面が出たら聖筭（シムポエ）といって神意の喜悦（吉）を示し、二個とも平面が出たら笑筭（チヨポエ）と称して神霊の冷笑・無視・拒否（無効）を表わし、二つとも凸面が出たら伏筭（カッポエ）で神の不機嫌・憤怒（凶）とみなすのである。」即ち「聖筭」が出たら、御神籤が引けるようになる。

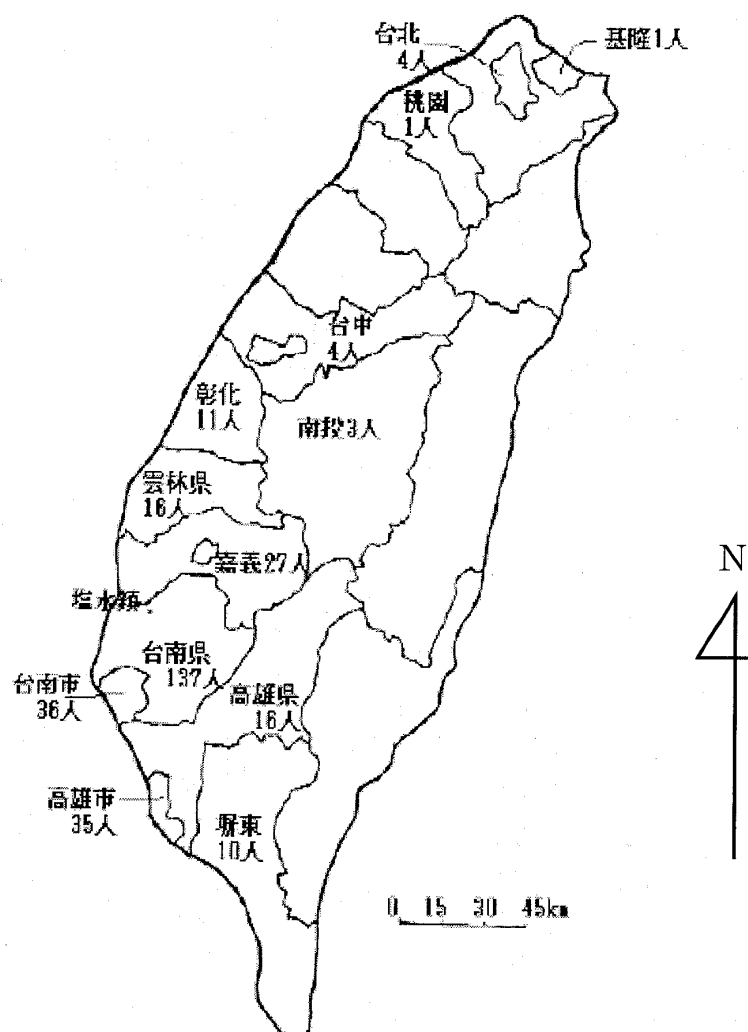


図1 調査対象の出身地分布図

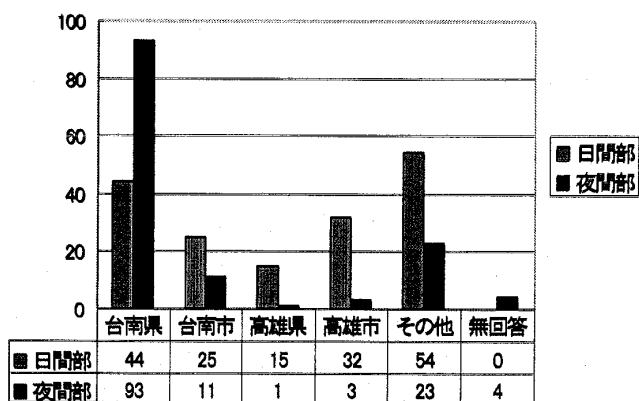


図1：調査対象者の出身地

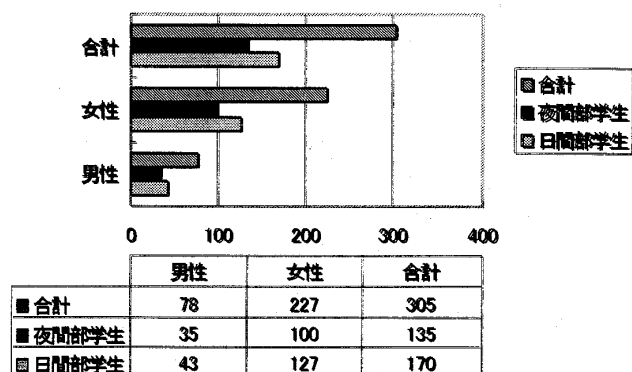


図2：調査対象者の性別

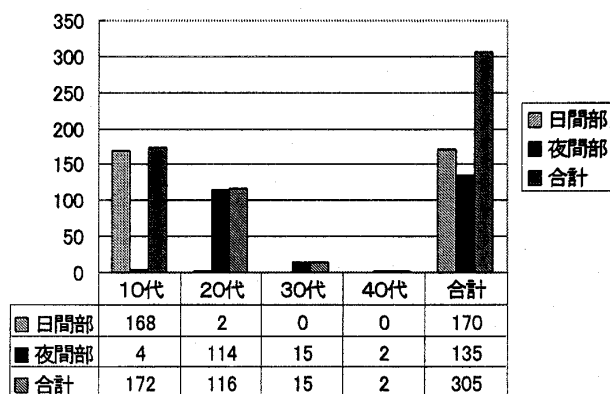


図3：調査対象者の年齢

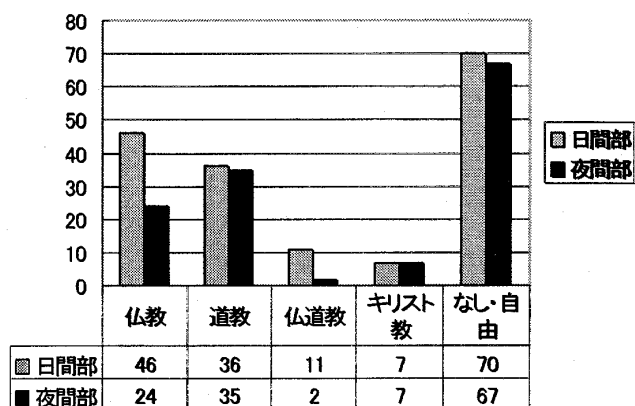


図4：調査対象者の信仰

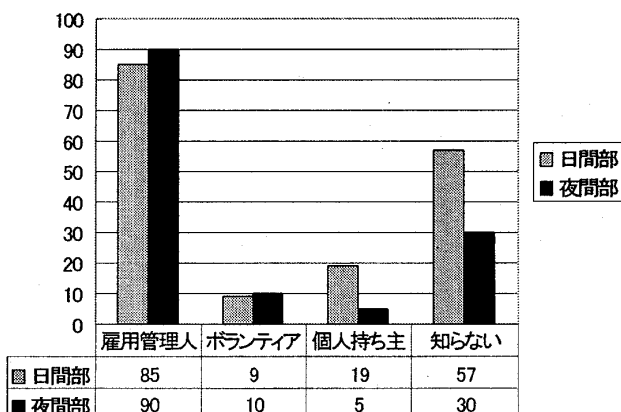


図5：廟の管理

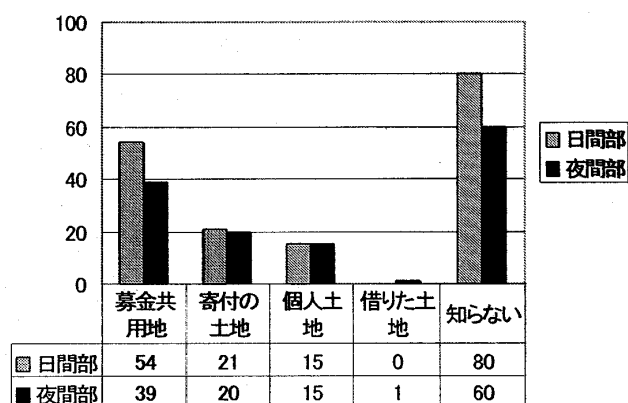


図6：廟の土地

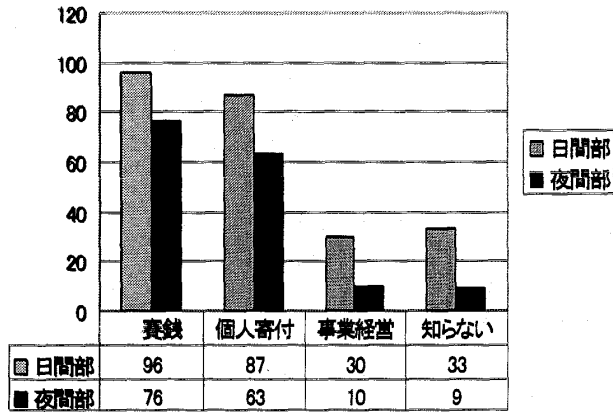


図7：廟の収入 (n = 305 による複数回答)

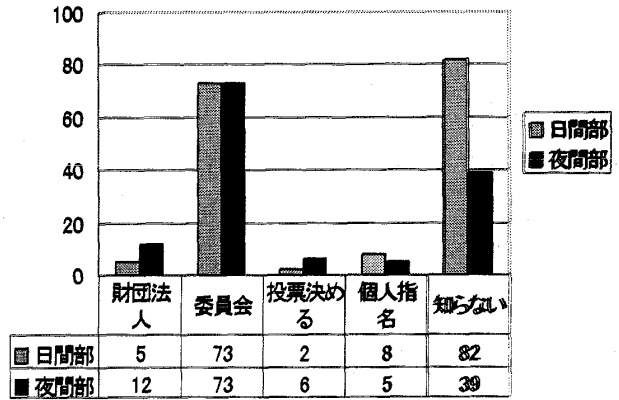


図8：廟の運営

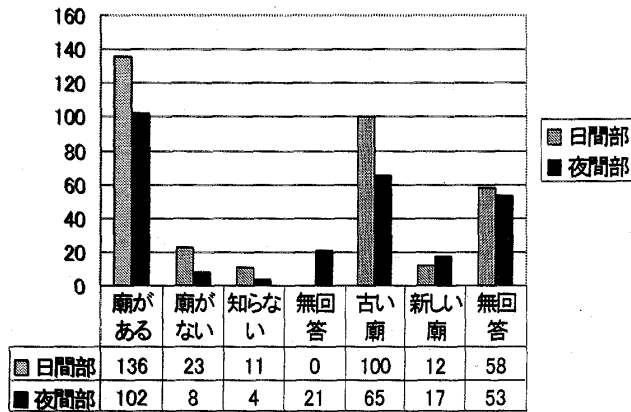


図9：近所の廟について

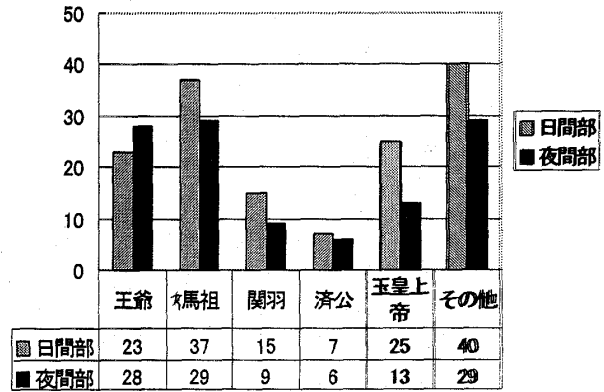


図10：祀っている神様

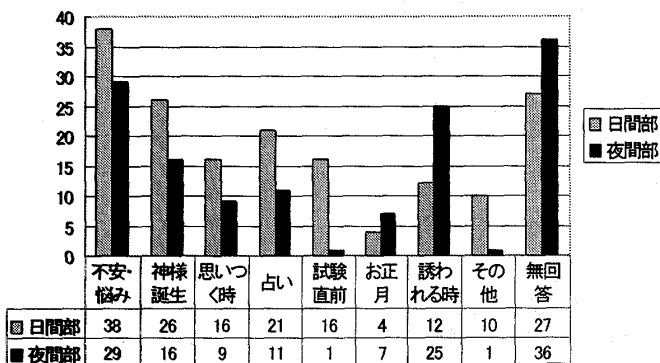


図11：廟に行く理由

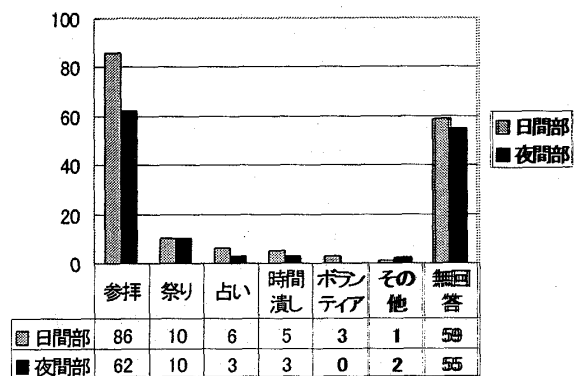


図12：廟に行く目的

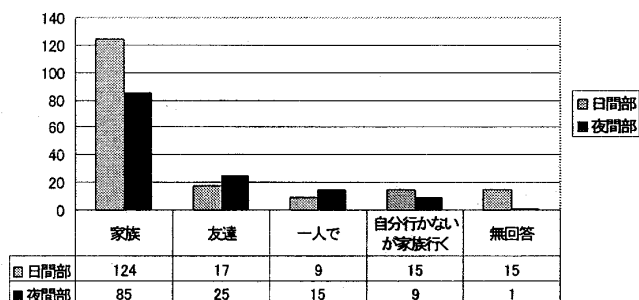


図 13：同伴者

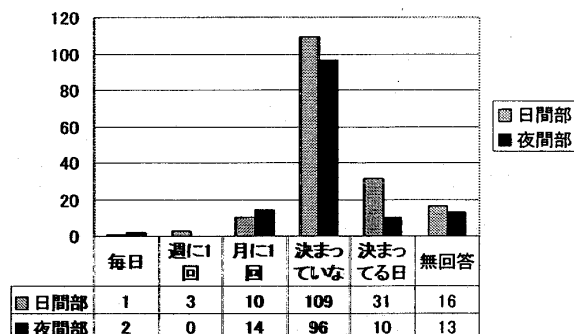


図 14：廟へ行く頻度

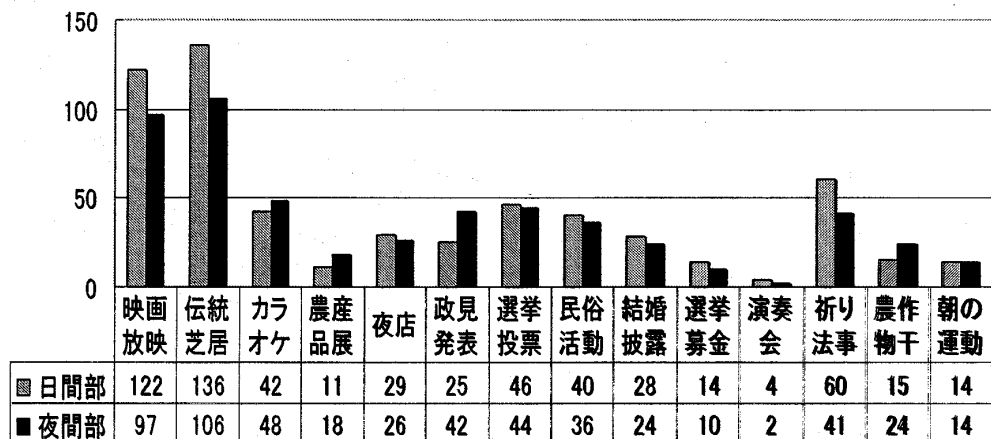


図 15：近所の廟で見たことがある活動（n = 305 により複数回答）

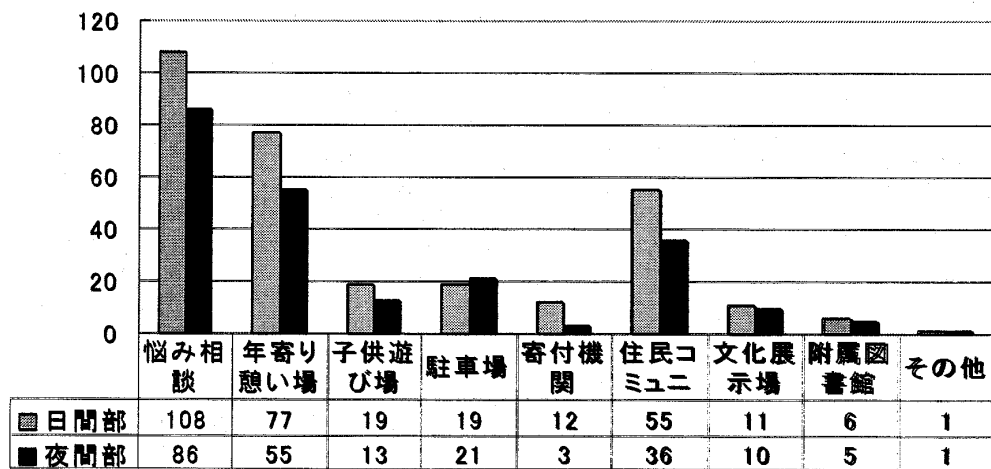


図 16：近所の廟が果たしている役割（n = 305 により複数回答）